

ジャック・ブズー著 平山 卓 訳

「わたしのニッポン発見」(三省堂, 1972)

山 口 嘉 夫 (物理)

気にいつて息もつかず読んだ本、買ったけれどつまらなくてカッカした本、であれば一気に胸のすく書評ができよう。しかし近頃真底面白かったという本にお目にかからない。今日は頼まれてよんどころなく書評をする。相手はジャック・ブズー著わすところの「わたしのニッポン発見」。行き届かぬ点は迄容赦。

日本人は依然として、他人(外国人)がわれわれ日本ないし日本人をどう見るかが気になる人種らしい。戦前のあまりに多い例はさておき、マクルーハンに喝采し、イザヤ・ベンダサンにうなづき、第三の大国をもちあげる……。上等舶来は江戸期いや遣隋使以来の抜きがたくしみこんでいるものなのか。そんな先入観をもってこの本に接したのだが、うれしいことに予期に反し、公平ないい文明批判の書であった。この本をすすめられた小堀先生の目はたしかであった。

さて、ベンダサンの身元は知らぬが、どこことなく日本人くさい隙間風が吹く。それに反しブズーは日本の民家を研究する正銘のフランス人地理学者であって、在日10年の経験をもつ。わが東大理学部客員研究員でもあった。その彼の見た日本にかんする気楽なエッセイ集がこの本である。

いい点も悪い点のみこんだ上で、素直に日本を見ようとする原著者の態度にすっかり好感をもった。卒直にいった機会がれば、塩豆をかじりながら、ゆっくり話したくなる人物と見受けた。外国へゆく人にぜひこの本を読んでほしい。そしてフランス→日本、日本→君のゆくであろう外国という反転を実行して他山の石としてもらいたい。外国へゆく人がこの著者のような目で見るこ

ができれば、本職の専門上に得る所がなくても立派な外国旅行をしたといえるであろう。

内容についての紹介は一切しない。読んでのお楽しみということにしたい。ただしこの書評らしき一文は、訳本(上々の訳である)を読んで物していることを証明するために、二三の「蛇足」をつけ加える:

著者が科学者だからであろうか、やたらと論理的フランス人をふりまわす。ドイツ人が彼ら流にかたくなな論理に肩肘はるのとよくにいておかしかった:それはフランス人の重要な一面ではあろうが、同じ論理的質問・論理的設定にヨーロッパの農牧民がどれほど論理的に答えうるかを思っていることだ。さらに日本の科学者も少しニュアンスは違うが同じ位理屈っぽかろう。まあ、お互い様ということに願いたい。

第二に、原著者はベルサイユかどこかの庭園をヨーロッパの模範と信じているようだが、これは中華思想フランス版であろう。フランスの宮殿に伴う庭園はイタリア・ルネッサンスの栄光を移植して完成したものの筈なのに。

第三に、フランスは古く、日本は若いという。著者の頭の中でフランスの歴史にギリシャ・ローマが解析接読されているのではないか。ローマ色からフランスが解放されて以来のフランスが日本に比べて本当に古かったかな。フランス人がローランの歌を歌ったときには、日本は散文文学の時代にあった。さらに極言すれば、日本には世界最古の土器ありと誇ろうか。

それはさておき、気楽になかなか楽しめる本である。一読一考をすすめたい。

著 書 紹 介

在外研究の記録としてユニークな本が出たので一寸御紹介しておく。坂口 豊「ウィーンと東アルプス」(古今書院, 1973年3月)で、ウィーン大学地理学教室を根城に「ウィーン好日」(第一章)を語り、「東アルプスところどころ」(第二章)では、著者の専門の自然地理学の立場からアルプスの氷河の問題などを学説史もふまえて堂々と論じている。ウィーンの町や森などの航空写真も興味深く、いかにも理学部の先生の著書にふさわしい。これからウィーンに遊ぶ人にも、かつてシュタート・オペールを観賞した人にも一読をおすすめしたい。

小堀 巖(地理)